

「未知なる他者」概念の導入による J. Appleton「眺望—隠れ場理論」の検討

鈴木 康太¹・齋藤 潮²

¹学生非会員 東京工業大学環境・社会理工学院土木環境工学系都市環境学コース
(〒152-8850 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail: suzuki.k.dg@m.titech.ac.jp)

²正会員 工博 東京工業大学環境・社会理工学院
(〒152-8850 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail: usaito@soc.titech.ac.jp)

イギリスの地理学者J.Appletonの著書*The Experience of Landscape*にて「眺望—隠れ場理論」は提唱された。この理論は樋口（『日本の景観』）をはじめ、わが国の景観研究者に概ね支持されてきた。しかし、筆者らは、街並みおよび庭園にこの理論を適用しようとするAppletonの手続きに疑問をもった。そこで、心理学的手法を用いて基本的な論点を再検討した。その結果、街並みおよび庭園についてAppletonが主張するようには被験者は反応せず、この理論を有効たらしめるには、隠れ場それ自体に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要があることが示唆された。

キーワード: J. アップルトン, 風景の経験, 眺望—隠れ場理論, 象徴, 未知なる他者

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

イギリスの地理学者J.Appletonの「眺望—隠れ場理論」は、人間の美的経験の源泉はその祖先たる野生動物の行動から求まるとするJ. Deweyの論考と、自分の姿を見せずに相手を眺めることが野生動物の生存に有利とした動物行動学者K. Lorenzの指摘をもとに提起された。ここから、観察者が見ることを妨げられない状況を「眺望」と呼び、観察者が隠れることができる状況を「隠れ場」と定義した。そして「眺望」と「隠れ場」が同時にかつ象徴的に得られる状況を景観的な美的満足の条件とする仮説を「眺望—隠れ場理論」とした。ここで象徴という意味をAppletonは、実体ではなく「...と思われる」といった連想を呼ぶ潜在性として捉えている。そして「眺望」と「隠れ場」の象徴を見出すことができるかを論点とし、様々な景観を分析している。

同理論は樋口（『日本の景観』¹⁾）をはじめ、わが国の景観研究者に概ね支持されてきた。しかし、筆者らは、Appletonが「眺望—隠れ場」理論の有効性を示すために引用した2組の景観（街並みと庭園）とその解説の仕方に違和感をもった。詳しくは該当章で述べるが、違和感の骨子を次に予め掲げておく。

- A) 街並みでは、優劣の判断について読者の同意を得ることをAppletonが意図したと思われる一対の景観が提示され、その優劣を「隠れ場」の象徴の存在から説明しようとしていること。
- B) 整形式（フランス）、風景式（イギリス）、ピクチャレスク式（イギリス）庭園を比較対象とし、イギリス式の優位性を論じる意図がある。Appletonはピクチャレスク式庭園と風景式庭園

の一対を掲げている。その解説では整形式庭園に「隠れ場」が乏しく、イギリス式がいずれも「隠れ場」が豊かであるとする文脈の中で、足の踏み場もないほど鬱蒼と草木が繁る（ピクチャレスク式庭園の）景観を、これを嫌う人がいるだろうことについてAppletonが一切考慮していないこと。

ここで筆者らが思い至ったのは、Appletonが引用した景観を、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した場合の着眼点がAppletonのそれとどのように異なるか、という点から「眺望—隠れ場理論」の問題点を抽出できないかということ。さらには、その問題点を考慮するとき、「眺望—隠れ場理論」は有効性を高めるのではないかということである。よって本研究の主たる目的は以下のとおりである。

- ① Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。
- ② Appletonの主張と明らかに異なる被験者の反応に注目し、その意味を考察する。
- ③ ②について、Appletonが何らかの吟味を行なっているか否かを検討する。
- ④ 「眺望—隠れ場理論」を肯定的に引用している景観研究者は②での考察についてどの程度吟味しているか、その言説をもとに検討、考察する。

本研究では主に*The Experience of Landscape*(1996, 改訂版)と、その訳書である『風景の経験 景観の美について』³⁾（以下、改訂版と訳書を参照した。

また、「景観」を「人間をとりまく環境のながめにはかならない」と定義する⁴⁾と、この「人間をとりまく」は環境のながめを通して「わたし」の存在を

環境の中に把握することだといえる。一方で「風景」は環境のながめに対する情緒的な賛意を前提としている場合があるとされている⁹⁾。

これを踏まえ、本研究では心理学的手法を用いて実験を行い、環境のながめを通して「わたし」だけでなく「他者」の存在を環境の中に把握する反応に着目したことを考慮すると、「景観」の方が適していると考えられる。そのため、以降は書名や訳出語の引用ではオリジナルのママとするが、本研究で示す場合は「景観」を用いることにする。

(2) 既往研究と研究の位置づけ

「眺望—隠れ場理論」を再検討しようとする研究は菅原⁶⁾、齋藤⁷⁾の研究などがある。菅原の研究では「記憶」といった観点から考察を試みている。しかし本研究では、「記憶」という観点から考えるのではなく、Appletonが「眺望—隠れ場理論」を用いた分析内容を吟味することで、同理論の再検討を試みている。また、齋藤の研究では、街並みに対する「眺望—隠れ場理論」の適用に関して、実際に踏み込んでいない。

本研究は、Appletonが引用した景観に対する彼自身の解説と実験心理学的手法を用いた同じ景観への被験者の反応、二つの差異をもとに、「眺望—隠れ場理論」が考慮すべき論点を明確化するという点において独自性があると言える。

(3) 研究の構成

第2章でAppletonが街並みと庭園についてどのように理論を適用し、どのような主張しているのかについて大枠を整理する。その上で筆者らが2組の景観(街並みと庭園)とその解説にもった違和感を詳細に述べる。次に目的①：Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。この達成のため行った予備実験、本実験の内容と、結果をそれぞれ第3章、第4章で示す。第5章では「未知なる他者」概念を導入し、目的②：Appletonの主張と明らかに異なる被験者の反応に注目し、その意味の考察、について扱う。第6章では目的③：②について、Appletonが何らかの吟味を行なっているか否かの検討、について。第7章では、目的④：眺望—隠れ場理論」を肯定的に引用している景観研究者は②での考察についてどの程度吟味しているか、その言説をもとにした検討、考察について扱った後、第8章で結論とする。

2. 「眺望—隠れ場理論」の適用と問題点

(1) 街並みへの適用

実際にAppletonが比較している街並みの景観を図1(次ページ)に示す。この街並みに対するAppletonの解説で筆者らが疑問をもった点は、建物の構造に着目して「隠れ場」の象徴が考えられている点である。

具体的には、街並みⅠの建物は隙間、窪み、突出した部分もないので、「隠れ場」の象徴としては劣り、街並みⅡの建物は不規則さ、張り出し、避難口、階段、植物があるので、「隠れ場」の象徴として優れていると分析している。しかし、建物に対する人間の評価はAppletonが述べる、構造上での表面的な視点からの分析だけでは不十分であると考えられる。

(2) 庭園への適用

主に庭園についてAppletonは整形式庭園(フランス)、風景式庭園(イギリス)、ピクチャレスク式庭園(イギリス)の3つの庭園方式について比較している。しかし、Appletonはフランス式とイギリス式を比較対象とし、イギリス式の優位性を論じる意図があると考えられる⁸⁾。以下にそれぞれの庭園に関する説明とそれぞれの庭園の代表例に関するAppletonの評価を簡単に表1に示す。

表1 各庭園に対する簡単な説明

	整形式庭園	風景式庭園	ピクチャレスク式庭園
発達した国	フランス	イギリス	イギリス
時期	17世紀	18世紀	18世紀以降
特徴	幾何学的、人工的に整備された自然に囲まれている。	曲線と起伏を利用し、非整形的で不規則である。	粗さ、不規則性、不均整、思いがけないものを意識。
各庭園に対するAppletonの評価	ベルサイユ宮殿を例に、眺望の象徴はヴィスタによって際立っているが、ヴィスタを形成する並木道は「隠れ場」の象徴を弱める。	図2、庭園Ⅰを例に、ベルサイユの植林地に比べてはるかに少ない樹木しかないが、 囲われているという感覚はより強く喚起される。	図2、庭園Ⅱを例に、前景に草木がまとまっていることで、眺望の利く場所が、眺望を目にできる小さな隠遁の場に変わる。

また、ピクチャレスク^{8),9)}とは粗さ、不規則性、不均整、思いがけないもの、といったことを通して、絵画の規則に従い、自然の見方を改善していくという美学である。18世紀以降、イギリスを中心に造園にも影響を及ぼした。また、風景式庭園をピクチャレスク派は批判した。

実際にAppletonが比較分析している風景式とピクチャレスク式庭園が一对となっている景観を図2(次ページ)に示す。Appletonは庭園Ⅱの鬱蒼とした部分について、表1に示したように隠遁の場と称し、「隠れ場」の象徴の一部として評価されると分析している。そこで、筆者らは庭園Ⅱの鬱蒼とした部分が現代のごく一般的な人々に好ましいと映るとする解説に疑問をもった。

以上の疑問をもとに目的①：Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。

そのため、後述する実験心理学的手法を用いて再検討する。



図1 理論の有効性の検討に際し引用された街並みの景観。訳書 図29,30より転載（以下左図を街並みⅠ,右図を街並みⅡとする。）



図2 理論の有効性の検討に際し引用された庭園の景観。訳書 図38,39より転載 左図は風景式,右図はピクチャレスク式の庭園（以下左図を庭園Ⅰ,右図を庭園Ⅱとする。）

3. 街並み・庭園の景観に対する予備実験

前述の目的①：Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。を達成するには、現代のごく一般的な人々がこの景観をどのように評価し、言語化するのかを分析する必要がある。そこで本実験の前に、この目的がそもそも論じるに値する内容なのかを確認するために、予備実験を行った。方法としては同じ研究室に所属する学生6名にSNS上にて図1, 2を送信し、景観から思うことを自由に回答してもらった。その結果、少なくとも街並みに関しては、建物の構造部分に関する評価は抽出されず、また庭園に関しても庭園Ⅱの鬱蒼とした部分が危険な場所として考えられる可能性があることが分かった。

よって、Appletonの主張は実験結果として十分に得ることはできず、理論を街並みと庭園に適用するのは再検討の余地があり、目的①：Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにすることが必要であることが分かった。さらに、Appletonの主張とは違った被験者の反応を考察する必要がある。しかし、予備実験では、具体的な考察を行うほど被験者が多くなく、実験の内容も簡易的なものであった。

以上から、第4章でより詳しい実験を行うことで、心理的要因を抽出する。

4. 本実験と結果の分析

目的①：Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。を達成するため、予備実験のように景観の専門知識を持っている人々に対し簡単な質問で済ませるのではなく、現代のごく一般的な人々に対し、より詳しい質問を準備した上で実験を行う必要がある。これを本研究では本実験とし行った。以下にその方法と結果の分析を示す。

(1) 実験方法

a) 景観の提示方法

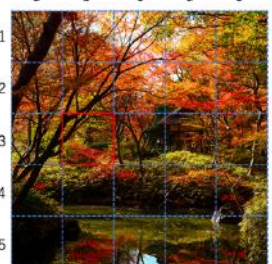
提示はWeb会議システムであるZOOMを用いて、オンライン上で被験者と筆者の1対1の環境で行った。景観の提示は図1, 2をそれぞれ提示した。景観を提示した上で質問内容に回答してもらった。景観の提示は図1, 2の順である。（以下、街並みの景観評価に関する実験は実験A、庭園の景観評価に関する実験は実験Bとする。）

実験Aに関する質問内容はQ1で「その街並みに行ってみたいか」を5段階評価で回答、Q2でQ1の評価理由の自由回答、Q3で「暮らすことになった時どう感じるか」に対する自由回答である。

実験Bに関する質問内容はQ1で「その庭園の好き嫌い」を5段階評価で回答、Q2でQ1の評価理由の自由回答、Q3で景観をグリッドに分け、Q1での評価するに至った最も決め手となった部分をそれぞれの庭園で回答、Q4でQ3において回答した庭園の部分と回答していないもう一方の庭園の同じ部分を比較して感じたことの自由回答である（Q3に関しては複雑なので景観を提示する前に事前に説明を行った。事前説明含めQ3, Q4の詳細に関しては図3参照）。

Q3事前説明：例のように画像がグリッドで区切られています。Q3ではこのグリッドから一つ選んでいただきます。もし赤色の部分選択したとすると、I-3-bと記入して送信してください。つまり
(風景番号) - (行) - (列)
の順にご記入ください。

例：（仮にこれを風景Ⅰとすると）
a b c d e



Q3：Q1での評価するに至った最も決めてとなった部分はどこですか？以下にグリッド分けされた庭園Ⅰ,Ⅱがあるので、その部分を庭園Ⅰ,Ⅱからそれぞれ1つ選んで回答してください。（境界部分の場合には、2つ回答してください。）

続き

	a	b	c	d	e
1					
2					
3					

庭園 I

	a	b	c	d	e
1					
2					
3					

庭園 II

庭園 I において最も決め手となった部分 (Q3-1)	庭園 II において最も決め手となった部分 (Q3-2)

Q4:Q3 で回答した部分とそのもう一方の庭園の同じ部分を比較して、どのように感じたかを記述してください。
 例えば Q3-1 で I-1-d と回答した場合、Q4-1 では I-1-d と II-1-d を比較してどのように感じたかを記述してください。
 Q3 で同じ部分を選択した場合は片方に回答するだけで結構です。(Q3-1,3-2 での回答が I-1-d, II-1-d の場合など)

Q3 にて庭園 I で回答した場所と庭園 II における同じ場所を比較してみて (Q4-1)	Q3 にて庭園 II で回答した場所と庭園 I における同じ場所を比較してみて (Q4-2)

図3 実験B Q3, Q4 (被験者に提示した質問内容)
ページをまたぐので枠線でくくった。

また、実験A, B両方において同じ質問を I, II にそれぞれ行っており、区別するため I に関する質問には-1を II に関する質問には-2を付けた。例えば実験AのQ2において街並み I に対する質問は実験A Q2-1と表記した。

b) 被験者

属性：大学生 人数：32名

基本的には無作為抽出を考えるが、オンライン実験という性質上、大学生という年齢の属性はやむを得ず一致させる。そのため「現代のごく一般的な人々」と実際の被験者とが正確には整合しない。また、それ以外の属性はなるべく偏りが無いようにす

るため、文理、男女のそれぞれの属性において均等な人数、8名に対し実験を行った。

(2) 結果の分析のまとめ

自由回答の分析に関しては、キーワードを抽出し、グループ分けを行った。グループ分けの基準はそのキーワードが記述されているか、あるいはそのキーワードから容易に関連すると考えられる記述が含まれているかである。

以下に分析結果とその考察についてまとめる。

a) 実験A (街並みの景観評価) について

1. Q1 (「その街並みに行ってみたいか」を5段階評価で回答)の結果に対し、各5段階評価に対する人数を棒グラフで表した(図4)。また、ウィルコクソン符号付き順位検定を行うと p -値は 1.5×10^{-5} となり、有意水準を1%としても、代表値には差が有意であることが示された。($I < II$)

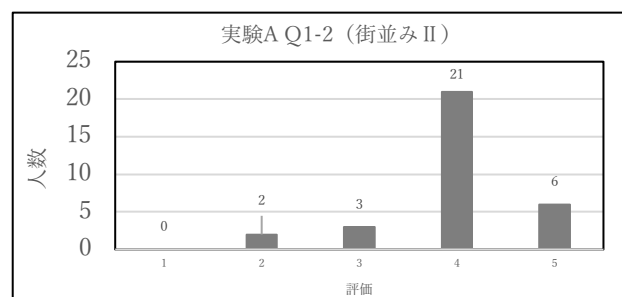
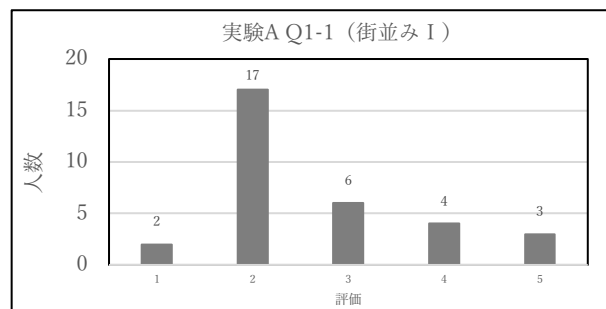


図4 実験A Q1 各評価に対する人数

2. Q2 (Q1の評価理由)の自由回答から、キーワードを抽出し、グループ分けを行った(図5、次ページ)。キーワード上では建物に関する回答が目立つ。しかし、ここでは、Appletonが「隠れ場」と関連づけた建物の構造(凹凸)への言及は少ないことがわかる(表2、次ページ)。

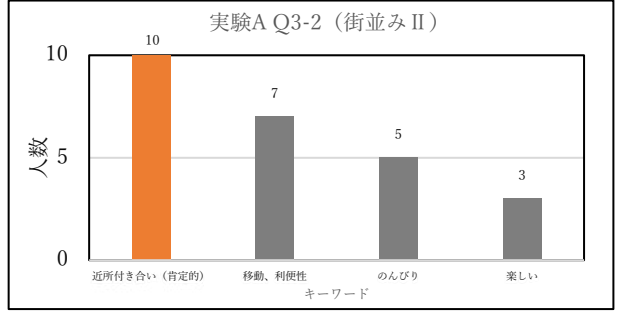
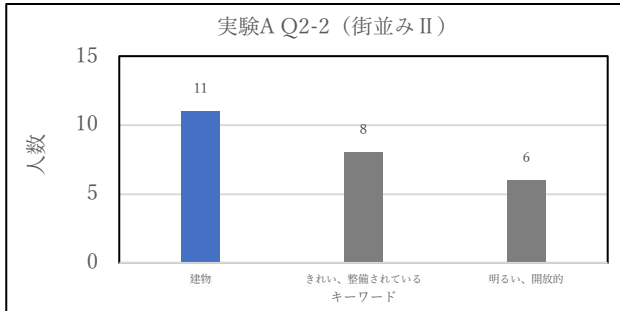
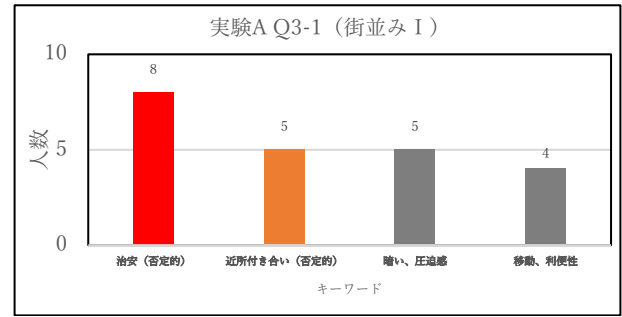
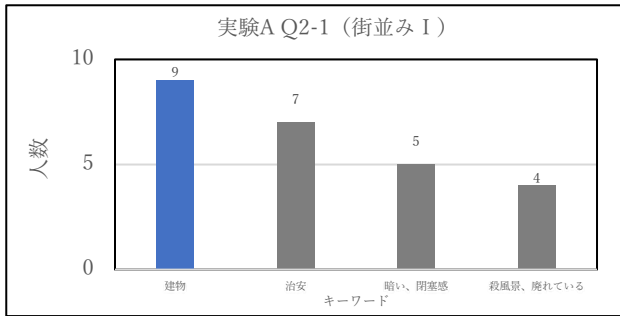


図5 実験A Q2 各キーワードとその抽出数

図6 実験A Q3 各キーワードとその抽出数

表2 実験A Q2で建物のグループに分類した回答の一部

被験者番号	Q2
6	家の作りがヨーロッパ諸国のように感じたため、治安がよさそうだから。
7	道幅も広く感じられて開放感もあり、建物に統一感があるなかでもそれぞれに違いや個性があるため魅力を感じた。
16	建物と道どちらにおいても綺麗に整備され、印象が良いため建物自体が綺麗そうなので（自身が古い建築物よりも新しいものの方が好きなので…）
17	西洋建築（ばい）町並みは近くにはないので行ってみたい。

3. Q3（「暮らすことになった時どう感じるか」）の自由回答から、キーワードを抽出し、グループ分けを行った（図6）。街並み I に否定的な評価をしたグループで、「治安」や「近所づきあい」という観点をその理由とした被験者が多いことが判明した。また、街並み II に肯定的な評価したグループで、「近所づきあい」という観点をその理由とした被験者が多いことが判明した。この治安や近所づきあいの可能性から街並みを評価するという観点は、Appletonが街並みの理論的検討で示した着眼点（構造の凹凸など）とは全く異なっていることがわかる。

b) 実験B（庭園の景観評価）について

1. Q1（「その庭園の好き嫌い」を5段階評価で回答）の結果に対し、各評価に対する人数を棒グラフで表した（図7）。また、ウィルコクソン符号付き順位検定を行うと p -値は 8.7×10^{-6} となり、有意水準を1%としても、代表値には差が有意であることが示された。
($I > II$)

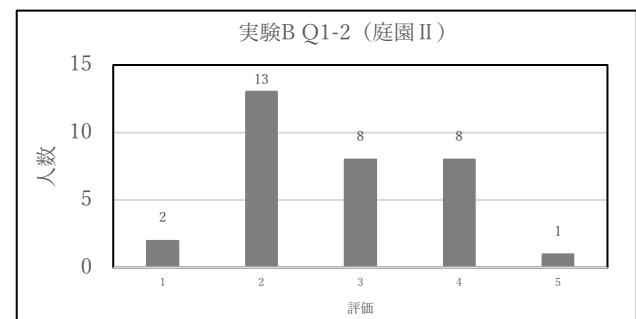
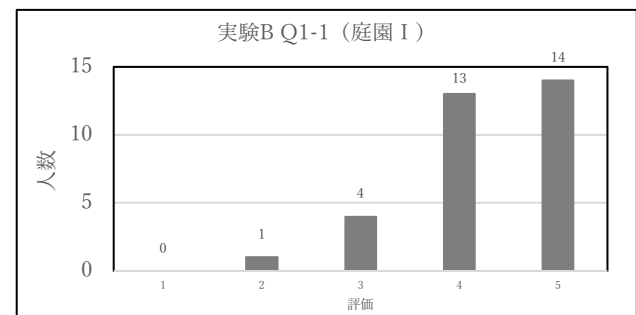


図7 実験B Q1 各評価に対する人数

2. Q2 (Q1の評価理由) の自由回答から、キーワードを抽出し、グループ分けを行った (図8) . その結果、「何か出てきそう」、「虫、動物」といったグループが分析より明らかとなった (図8) . つまり、被験者は、庭園Ⅱに「未知なる」存在が潜んでいる可能性を直感すると思われる。特に「何か出てきそう」といった文言には、観察者が危害を加えるかもしれないという恐れや不安を直感する場合があることが考えられる。

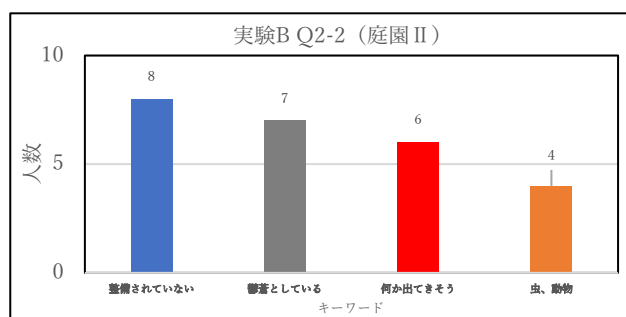
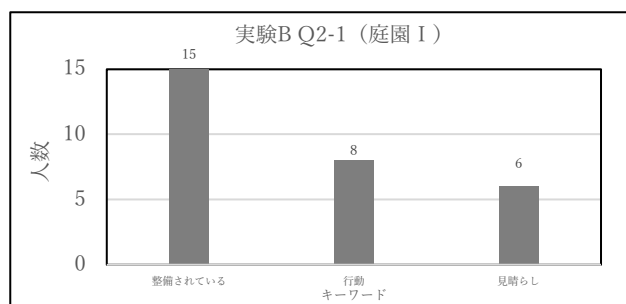


図8 実験B Q2 各キーワードとその抽出数

3. Q3 (景観をグリッドに分け、Q1での評価するに至った最も決め手となった部分) の自由選択回答では、特に庭園Ⅱに関して鬱蒼とした茂みの部分に回答が集中している (図9) . 質問内容よりQ3で選択した部分が決めてとなり、Q2の評価理由からQ1の5段階評価につながっていることが分かる。よって鬱蒼とした茂みの部分が、危害を加えるかもしれないという恐れや不安を直感することに起因していることが示唆される。

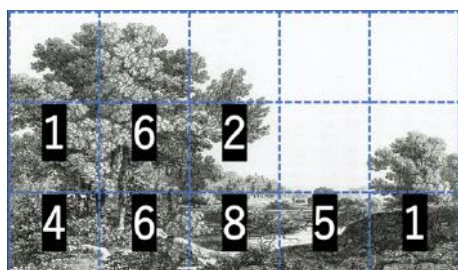


図9 実験B Q3 庭園Ⅱの各グリッド選択数

4. Q4 (Q3で回答した方の庭園で選択した部分と、回答していないもう一方の庭園の同じ部分とを比較して感じたこと) の自由回答では、内容が

多種多様であり、キーワードによるグループ分けは困難であったが、少なくとも恐れや不安を直感する内容はいくつか得られた (表3) . この内容は図10に赤枠で示した部分を比較したものである。この部分は庭園Ⅰ、Ⅱでは特に対照的で庭園Ⅰでは開けて奥まで見通せるが、庭園Ⅱでは鬱蒼としており見通すことができないため対照的な部分である。

表3 実験B Q4で恐れや不安を直感する評価言語の一部(太字部分)

被験者番号	Q4
17	前者は「ほどよい自然・人の手によって手入れされた自然」という印象だが、後者は「未開拓の地・人間を介す以前の自然」という印象。 前者は穏やかさを感じるが、後者は先が見えないので、何があるんだろうと思う。動物などの脅威すら感じる。
29	2は木と地面の境目が見えないため奥が見えない不安感があり、 何かが潜んでいそうな印象を受ける。

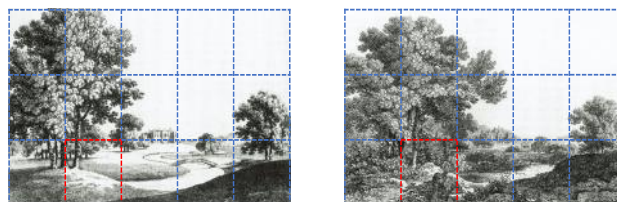


図10 実験B Q4 において赤枠部分が表3に示した回答が比較した部分

5. 「未知なる他者」という視点からの考察

本章では「未知なる他者」概念を導入し、目的②：Appletonの主張と明らかに異なる被験者の反応に注目し、その意味を考察する。

(1) 「未知なる他者」とは

未知なる他者とは、危険や不安を直感するような「他者」の存在を「未知なる他者」と定義する。

この「未知なる他者」が、Appletonの理論にとって重要な視点だと思われる。なぜなら、景観から「未知なる他者」の気配を感じとることで、Appletonが述べる「隠れ場」の象徴と「危険」の象徴が重複し、隠れ場として直感されないことがあるからである。つまり、隠れ場自体に危険を直感し「隠れ場」の象徴が危険からの保護を表す象徴ではなくなることがある。

以降、この「未知なる他者」という視点のもとで結果の分析・考察を行う。

(2) 実験A (街並みの景観評価) について

実験Aでは、主にQ3 (「暮らすことになった時どう感じるか」) に対する回答内容から「未知なる他者」の視点が抽出された。

街並みⅠは特に、「暮らすことになった」場合、「他者」が意識されやすくなる。さらに、この周辺に住んでいる人、通りすぎる人は「未知なる他者」と

直感されやすくなる。その結果、全体的に治安が悪そうといった街並みに否定的な評価になると考えられる。

一方で、街並みⅡでは、「暮らすことになった」となると街並みⅠと同様「他者」が意識されるが、「未知なる他者」ではなくむしろ親しみやすい他者と直感されやすく、その結果、全体として街並みに肯定的なグループが抽出されたと考えられる。(表4)

表4 実験A Q3で「未知なる他者」が意識されていると考えられる評価言語の一部(太字部分)

被験者番号	Q3 街並みⅠ	Q3 街並みⅡ
6	日本ではあまり見ない家の作りになっているため、 治安が悪そう で、 生活様式が変わりそう で 不安 。	所得レベルは日本と同じくらいだと感じるため、 治安がよさそう で、 ここまで不安を感じることはない 。
13	住みにくそうに感じる。 強盗などに遭いそう で少し怖い。	清潔感があるので、暮らしていて 楽しそう 。ご近所の人も 優しくしてくれそう 。

(3) 実験B（庭園の景観評価）について

実験Bでは、特に庭園ⅡにおけるQ2（5段階評価の評価理由）、Q4（Q3で回答した方の庭園で選択した部分と、回答していないもう一方の庭園の同じ部分とを比較して感じたこと）の回答内容から「未知なる他者」の視点が抽出された（Q4に関しては表3参照）。

庭園Ⅱでは先が見えない不安感から「何がいるかわからない」など「未知なる他者」の気配に関する評価が抽出されている。さらに、「未知なる他者」の気配から危険といった評価も抽出されていることが分かる。(表5)

表5 実験B Q2で「未知なる他者」が意識されていると考えられる評価言語の一部(太字部分)

被験者番号	Q2 庭園Ⅰ	Q2 庭園Ⅱ
3	奥に建物が見え、その手前に木々があることによって、 秘密基地 見つけました感がある	行っても、行っても森が続くそうで不安感がある、 鬱蒼 としている。 何が いるかわからない
28	綺麗に整備されている。ピクニックなどでできそう。	手入れされていない場所に見える。行動しずらく 何が あるかわからない 、 危険な場所 のように 思える 。

よって、「未知なる他者」が直感されることで「隠れ場」の象徴と「危険」の象徴が重複し、Appletonが主張した「隠れ場」の象徴が必ずしも好ましい景観と評価されないと考えられる。つまり、「眺望—隠れ場理論」を有効たらしめるには、隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要があることが示唆される。

6. Appletonの象徴に関する考察

第5章の考察によって「眺望—隠れ場理論」を有効たらしめるには、隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要があることが示唆された。一方で、Appletonは「眺望」、「隠れ場」の象徴の考察とは別に「危険」の象徴についても考察している。よって、同考察内容は「危険」の象徴あるいは「隠れ場」の象徴におけるAppletonの主張において本来、言及されるべきである。

よって本章では目的③：「眺望—隠れ場理論」を有効たらしめるには、隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要があることについてAppletonが何らかの吟味を行なっているか否かを検討する。

(1) 「危険」の象徴について

この「危険」の象徴では「崇高」について述べられている。危険があるとどこまで抑えて受け入れ、壮大な自然の力の感覚に晒されることが「崇高」経験には欠かせないと述べており、一種の美的満足として位置付けられている。さらに、自然の力のなすがままに味わう経験はピクチャレスク派の美的感覚の基礎をなす、と述べている。つまりAppletonは「崇高」とピクチャレスク派の美的感覚は密接に結びついていると考えている。

一方、図2における庭園Ⅰ、Ⅱはそもそもピクチャレスク派の代表的な人物であるRichard Payne Knightの『教訓詩「風景」』にて発表された景観である。風景式庭園の代表的な造園家であるCapability Brownによる風景式庭園（庭園Ⅰ）とピクチャレスク式庭園（庭園Ⅱ）が一对の比較として挿入されている。しかし、比較のため挿入されている庭園はKnightがピクチャレスクの方が優れていると主張するために描かれた景観である。

理論の有効性を論じるためAppletonはこの意図的に描かれた景観を引用している。さらに、Appletonは庭園Ⅱの鬱蒼とした部分は「崇高」という美的満足から考えれば、危険は十分に受け入れられ「隠れ場」の象徴として効果的に現れる、と評価している。

しかし、実験Bの結果と考察から、現代の一般的な人々は鬱蒼とした部分に「危険」の象徴を見ており、これを美的に眺める可能性は低いということがわかった。よって、鬱蒼とした部分が「崇高」という美的満足に結びつけられるという仮定は、ピクチャレスクが賛美されていた時代はともかく、現代人にとっても妥当かどうかは検討を要すると言わなければならない。

(2) 「隠れ場」の象徴について

Appletonは、多くの建物は敵の脅威から守るという目的のもと人工的に作られたものであるから「隠れ場」の象徴になり得るとして述べている。さらに、その建物の「隠れ場」の象徴として重要なのが「近づきやすさ」だとしている。具体的には窓、バルコニ

一などを挙げており、外見的な構造部分に着目している。つまり、建物を敵から身を守ってくれる場所として位置付け、その上でその絶対的な場所に近づけると暗示させる（象徴）要素が多い方が優れていると主張している。ここでは、「隠れ場」の象徴に危険を直感するという可能性については全く言及していない。

一方、実験Aの結果と考察から現代の一般的な人々は「隠れ場」の象徴が高評価とならない場合、その理由として「未知なる他者」が関係していることが示唆された。ここには、Appletonが参照した野生動物の生存本能だけでは説明しきれない現代人の人間的心理学が働いていると言える。

以上、(1)、(2)から、Appletonは各象徴の考察において、「眺望—隠れ場理論」を有効たらしめるには、隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要があることが示唆された。

7. 景観研究者の言説との照合

『風景学入門』¹⁰⁾と『日本の景観』では「眺望—隠れ場理論」は肯定的に引用されている。よって第7章では、以上2つの著者である中村、樋口について目的④：「眺望—隠れ場理論」を肯定的に引用している景観研究者は②での考察についてどの程度吟味しているか、その言説をもとに検討、考察する。

また、各節（『風景学入門』と『日本の景観』）の引用部分に関しては斜字で表し、該当ページを(p. ○)と示す。

(1) 『風景学入門』について

『風景学入門』の、環境の人間化という節で中村は、「自然に包囲された精神が自らの安心を得るためにとってきた戦略」(p. 115)として3つの体系に分類している。この内の3つ目は「自然環境に対する根底的な不安を打ち消すために積極的介入を行う」(p. 116-117)というものである。この戦略の位置付けは、Appletonが重視した生息地理論と似ている。生命の不安から逃れ、生存するのに有利な環境が美的満足に影響する、という点ではほぼ同義とみてよい。

さらに、中村は次のように言う。「人手の入ったB型の方がより人間に好まれることは実証されている。」(p. 117)ここでB型と言うのは立木と下生えが密生した足の踏み場もないような状態（図11左上）であり、これと対峙させられているA型とは、立木が程よい間合いで植えられ下生えは短く刈り揃えられた芝地（図11左下）である。中村の文脈上、A型の景観は自然環境に対する根底的な不安が拭い去れないということだろう。図11に示すように、中村が例示したA、B2つの対比的な景観（左上下）は、Appletonが引用したピクチャレスク式庭園の景観と風景式庭園の景観との組み合わせ（右上下）に類似している。

しかし、中村はこの問題を「眺望—隠れ場理論」に関連付けることはしなかった。



図11 左図は『風景学入門』に示されている2つの景観
右図は図2の再掲

『風景学入門』で中村は、「眺望—隠れ場理論」を「見る」と「籠る」という節において初めて引用する。「籠る」に関しては「招かざるような含みのある面持に、さまざまな想像がふくらんで、何かしら奥ゆかしい気分誘いこまれるのである。」(p. 120)と述べられている。また、この「籠る」は後に「他者の視線から身を守るような振る舞い癖」(p. 122)としてAppletonの「隠れ場」に対応するとしている。また、Appletonの言説については「動物としての人間がその生存を全うせんとする願望」(p. 122)としており、あるいは「ここには、動物としての人間の生活領域の外側・内側という感覚が醸し出す独特の味がある。」(p. 120)とする。しかし、人間の生活領域に「眺望—隠れ場理論」を適用する上で「隠れ場」とされる場に「危険」が潜んでいるかもしれない、換言すれば、「自然環境に対する根底的な不安」が絡む可能性についての言及はみられない。

さらに「籠る」で挙げられている例では「西洋中世の僧院や城郭都市なども、外見はそっけなく、またいかついけれども、内側には人の身の丈と体温に見合った空間を宿していて、やはり「籠り」に通じる趣が感じとれる。」(p. 120)とあるように、「籠り」にはすでに人の温もりが含まれる、感じ取れる、という前提で考えられていることがわかる。つまり、隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険がすでに排除され、既に人間的なるものが満たされている景観が前提されているのである。

(2) 『日本の景観』について

『日本の景観』において「眺望—隠れ場理論」は休息場という一つの空間を考察する際に適用されている。中でも図12（次ページ）の景観では「凹型で休息性・隠れ場所性のある景観であるとともに、街路に対して眺望が開けている。典型的な凹型の棲息地景観、生きられる景観である」(p. 245-246)と述べられている。しかし、この空間が休息場と感じられるのは包み込むような構造以上に、人が実際にくつろいでおり綺麗にテーブルや椅子が並んでいるからであると考えられる。もし、この空間に人が存在せず、

綺麗なテーブルや椅子が並んでおらず無造作に置かれている状態であれば、人々は休息場としてよりも荒廃して危険な場所だと認識するだろう。



図12 『日本の景観』に示されている評価されている休息場

つまりこの空間が樋口が指摘するような休息地性として機能する要因は、物理的に屋根があり、空間として包み込まれているという構造的な観点のみでは語れない。そこに敢えて言及していないのは、樋口が「隠れ場」を危険の象徴が除去された状態を暗黙の前提としている体と思われる。

以上から明らかなように、Appletonの「眺望—隠れ場理論」を肯定的に受けたとめたわが国の代表的景観研究者は、Appleton自身がそうであったように、「隠れ場」に「見知らぬ他者」が潜んでいる、敵意を持った何かの痕跡を見出してしまうような状況を想定していない。

しかしながら、このことは、ピクチャレスク式庭園の景観や、荒廃感の強い街並みに一般の被験者が示した一種の拒絶反応を考慮すると、野生動物としてではなく、人間的な社会生活を営む主体にとってのこの理論の意味と限界を曖昧にしたと言わなければならない。

8. 結論と今後の課題について

ここで本研究の目的を改めて提示しておく。

- ① Appletonが引用した景観について、現代のごく一般的な人々が直感的に評価した結果とAppletonの主張とを比較し、その差異を明らかにする。
- ② Appletonの主張と明らかに異なる被験者の反応に注目し、その意味を考察する。
- ③ ②について、Appletonが何らかの吟味を行なっているか否かを検討する。
- ④ 「眺望—隠れ場理論」を肯定的に引用している景観研究者は②での考察についてどの程度吟味しているか、その言説をもとに検討、考察する

これに対し、得られた知見を順に掲げると次のようになる。

- ① 少なくとも現代の大学生が直感的に評価した結果はAppletonの主張とは整合しない。前者では、虫、動物など他者の存在への不安を景観に直感する反応が確認された。
- ② ①で明らかになった人間的な心理の内容を「未知なる他者」という概念の導入から考察した。その考察から「眺望—隠れ場理論」を有効たらしめるには、現代の大学生が隠れ場に「未知なる他者」が潜む危険を直観する可能性を考慮する必要がある。
- ③ ②について、Appletonは吟味を行なっていない^[1]。
- ④ 景観研究者は、すでに隠れ場から危険が排除されている前提で「眺望—隠れ場理論」を肯定的に引用している。このことが、野生動物としてではなく、人間的な社会生活を営む主体にとってのこの理論の意味と限界を曖昧にしたと言わなければならない。

ごく一般的な人々を日本人大学生で代表させた問題の克服、さらに言えば、ピクチャレスク庭園を支持した歴史を持つ英国人を被験者とした同様の実験の企画などが今後の課題である。

謝辞：予備実験、本実験にご協力いただいた被験者の皆様に心より感謝いたします。

補注

- [1] これに加え、「危険」の象徴に関しては、庭園においてイギリス式の方がフランス式より優れていることを示したいという事情、「隠れ場」の象徴に関しては、動物視から脱却できなかったという事情が含まれていると考えられる。

参考文献

- 1) 樋口忠彦、『日本の景観』、技報堂、1975
- 2) J. Appleton, 『The Experience of Landscape』、WILEY、1996、改訂版(1975、初版)
- 3) J. Appleton(菅野弘久訳)、『風景の経験 景観の美について』、法政大学出版、2005
- 4) 土木工学大系編集委員会編、中村良夫ほか著、『土木工学大系13 景観論』、彰国社、1977
- 5) 篠原修編者、『景観用語辞典』増補改訂第二版、彰国社、2021
- 6) 菅原潤、風景論の展開と景観論の限界、長崎大学環境科学部分化環境講座、2006.7
- 7) 齋藤潮、J.アップルトン『風景の経験』を読む「眺望—隠れ場理論」の問題と可能性の検討についての試論、景観・デザイン研究講演集 No.9、2014.12
- 8) 安西信一、ピクチャレスクの美学：ギルピン、プライス、ナイトをめぐる、美学会、40巻2号p. 36-49、1989
- 9) 岩井茂昭、イギリス風景式庭園と「ピクチャレスク」の概念、近畿大学教養・外国語センター紀要.3(2)p. 33-47、2013
- 10) 中村良夫、『風景学入門』、中公新書、1982